INFORMATION

舞台芸術祭 にぎやかに開催中!!

シアトリカル應典院舞台芸術祭
SPACE：DRAMA
2000



舞台芸術祭。いよいよ2月27日には、フィナーレを迎えます。

今回の舞台芸術祭は、應典院という「場」の特性を活かしつつ、舞台芸術の「場」として、どのように創りあげられるのかというもの。個性的な5劇団が集合し、自らの手で創りあげる芸術祭として開催してきました。

公演中には、公演劇団が自分たちの演劇への思いを語るトークセッションも開催。来場の観客のみなさんと一緒に、演劇論のみならず、自分たちの生き方を互いに共有する場として、この演劇祭の名物となっています。

アーティストたちの熱気あふれる舞台芸術祭。最後まで全力疾走です。







舞台芸術祭のファイナルは2月27日

2ヶ月間の舞台芸術祭のファイナルは2月27日。劇団青い鳥主宰の芹川藍さん、應典院応援団で演劇プロデューサーの津村卓さんをお迎えします。

演劇を通じて、自分の内面に気づいていく芹川さんの演劇ワークショップ、扇町ミュージアムスクエア、伊丹のアイ・ホールの設立に関わり、地域と舞台芸術との関わりを研究してこられた津村さんを囲んでのトークセッションです。

若い演劇人はもとより、應典院という「場」で、これからの舞台芸術のもつ可能性と、これからの地域への広がりを考えます。

問合わせ、申込みは事務局まで。

○芹川藍の演劇ワークショップ
「からだでココロを考える」
・2月27日（日）
午後1時～午後4時
・ファシリテーター
芹川　藍さん
・参加費
1000円

○トークセッション
「共空間で出会う人、ヒト、ひと」
・2月27日（日）
午後4時30分～午後6時
・ゲスト
津村　卓さん
舞台芸術祭実行委員
・参加費
無料

【新入会員ご紹介】

（1999年2月14日まで）

12月11日以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
古芝　保治　大阪市天王寺区

サリュ VOL. 18
應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日　2000年2月15日
（偶数月発行）
編集人　池野　亮
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

2000 FEBRUARY
vol. 18



「日本人は無口だ」、ある外国人がいった。そういえば最近、毎日の中で見ず知らずの人との会話はほとんどないような気がする。近所の人と出会っても、挨拶程度で会話はない。

人に声をかけるのは勇気がいる。けれどは声を掛けずに出会いは始まらない。そう考えると、毎日出会いのチャンスをいくつ見過ごしていることか。

新しい年、ほんの少し勇気を出して、たくさんの出会いを探していこう。

新春座談会

都市の中のお寺としての役割は……

空間に思いを込める、應典院の可能性

昨年12月、應典院は第19回大阪都市景観建築賞（大阪まちなみ賞）の奨励賞を受賞。この賞は府・市と府建築士会が主催する権威ある賞で、市民から推薦された総数225点の候補の中から選ばれました。

折しも應典院は今年3周年を迎え、賞に恥じることない活動をしていくことが求められます。これからの展開をどうすればいいのか、それを考えるひとつの手がかりとして、お二人のゲストに語り合っていただきました。司会は、應典院プロジェクトの西島宏さんにお願いしました。



▲大阪まちなみ賞の授賞式。寺院の受賞は、まちなみ賞では始めて。

「お寺を開く」試みの成果は

――應典院の活動がスタートして今年の5月で丸3年を迎えます。今後の方向性やテーマを考えるひとつの区切りとして、当初からご支援いただいているおふたりに、いままでのことを振り返りつつ率直なご意見をお聞かせいただければと思います。

岩井●スタート時点で秋田住職からお話を伺ったときは、もう少し抹香臭いものになるのかなと思っていたんですが（笑）、実際はそうでもありませんね。

私は『サリュ』で活動の様子を拝見する程度ですが、最近はコンセプトがはっきりしてきたというか、ひとつひとつの点をつなぐ糸が見えてきたなと思っています。

また最近は、「應典院のようにやりたい」とおっしゃるお寺さんも増えていて、確実に成果は出てきていると思います。



▲第20回寺子屋トーク「日本人の死に方」。

西出●私は、秋田住職の“物好き”からはじまったと思っているんですよ（笑）。新しいことを切り開くことの基本は、“物好き”にあるわけですから……。

ただ、当初から「お寺としての活動をしてください」といってきましたし、そういうものがもう少し増えてもいいとは思っています。

――おもしろいですね。岩井さんは「意外と抹香臭くなかった」とおっしゃるし、西出さんの方は「もっとお寺らしい活動を」とおっしゃる。

立ち上げ当初は、「宗教的な活動とそうでない部分をはっきり分けないと誤解を受けるのではないか」という意見もあり、いろいろな議論を重ねてきました。

「お寺を開く」というと従来型の布教活動として見られてしまう心配もありますが、そのあたりはどうお考えですか。

岩井●昔は、お寺も神社も文化的な活動をかなりしていましたよね。そういう意味で應典院の活動は、モダンだけど本来あったことをやっているだけで、ごく普通のお寺だともいえるでしょう。

もっとも私は、布教活動というより「大人の寺子屋」というイメージがありますけどね。



岩井珠恵さん
（株）クリエイティブフォーラム代表取締役、大阪市立大学非常勤講師、ヴィジュアルデザイナー。構造物景観形成やモニュメントデザイン等の環境創造から商品パッケージまで、幅広いデザイン活動を行っている。著書に『都市の魅力』（都市文化社）、『風土とまちづくり（その第一歩）』（技術出版）など。

西出●はじめてここを訪れたとき、2階のロビーからお墓が真っ正面に見えることに感銘しました。そこに應典院のコンセプトをダイレクトに感じたんです。

「お寺としての活動」といいましたが、換言すれば、広い意味での「宗教性に支えられた活動」こそが必要だと思います。だから、死と向き合うことが生を問い直すことになるという仏教的なカラーを、もう少し活動に盛り込んでいってはどうでしょうか。

伝えていくものは何？

岩井●今日、ここへ来る前に何をお話しようかと考えていたんですが、「三国志」のことを思い出しました。

中国に仏教が伝来してきたときの様子が書かれているんですが、それまで中国には宗教というものがなかったんですね。それで、はじめて仏教者に出会った中国の人たちは「なんてすがすがしい人たちなんだ」とびっくりしたわけです。

「すがすがしい」という表現は、もっとも仏教に似つかわしい言葉だと私は思っていて、應典院に来て空気のすがすがしさにふれるというような、言葉ではない何かを感じとってもらえれば、それで十分ではないでしょうか。

――宗教にふれるきっかけづくりということでしょうか。

岩井●そうですね。宗教というより、「心にひとつの規律を作るものとの出会い」というのでしょうか。そういうものが、いまの日本にはあまりにもなさすぎるので、一人ひとりのドアをノックするようなことができればいいんじゃないでしょうか。

――宗教性といったときにどこまでなら容認されるのか、悩むところですが、発信する側が意識しすぎるところもあるんでしょうか。

岩井●昨年暮れに、應典院が“大阪まちなみ賞”に入賞されました。私もその審査委員のひとりなんですが、審査のとき「ここは建物の中まで道になっている」という評価がありました。建築設計の成果だともいえますが、お寺が開いていることと、たんなるイベント空間ではないことを体感してもらう、まずはそこからでしょう。

――モダンな外見だけでは十分ではないということですね。

岩井●そうです。應典院は空間と活動が一体であることに意味があるし、それをアピールしていく努力も必要だと思います。

西出●都市におけるお寺の役割を考えた場合、應典院がひとつのモデルになっていくことは確かでしょう。しかし、これからどういう方向に踏み出していくのか、それが今後の課題だと思います。

岩井●いままで培ってきたものをどこにつないでいくのか、それがたんなる布教活動と文化活動との分かれ目になるでしょうね。



▲協力事業「JOCSフェスティバル」。

違いは違いのままで

――いま、宗教に対するさまざまな議論があることは否定できないと思いますが、あえてそこを取り上げる意図で、昨年7月に「ノストラダムスをぶっとばせ」というシンポジウムを行いました。

仏教の各宗派の方々に集まっていただき、オウムや戒名のことにもふれましたが、それぞれの宗派の見解が微妙に違うんですね。そういうズレをオープンにしていくことは、宗教が開かれていくための大事な要素ではないかと思いました。

西出●現在、世界の宗教界の大きな流れは諸宗教間の対話です。私もそれが大切だと思います。

宗教は同じになり得るはずはないし、過去の歴史を見るとひとつの価値を強制しようとすることで争いが起こったりしていますよね。違いを認め合い、共生がいかに困難であるかを自覚することがまず第一歩だと思います。

岩井●いまの社会では、「見解の違い＝異端」だと排除してしまう傾向が強いですものね。

――最近は「グローバルスタンダード（世界基準）だ」といって、ひとつの基準以外はあってはいけないという風潮が強いですね。

西出勇志さん
共同通信社文化部記者。ライフワークとして取り組んでいる取材テーマは宗教と精神性。2年前から勤務する大阪文化部では学芸欄のほか、演劇や古典芸能も担当している。共著書に『アジア戦時留学生』(共同通信社)、『テレビドラマ"ギフト"の問題』(岩波ブックレット)、『アンダーコンシャス・センセーション』(日本評論社)など。



岩井●ヨーロッパの方たちは「アメリカの基準はアメリカだけのものであって、世界の基準ではない」と押し返せる、自分の意見をきちんといえるんです。

でも日本は、「これがグローバルスタンダードだ」といわれると、無理して合わせようとしてしまう傾向があります。

――場所のことでいえば、ある目的のためだけの建物ではなく、多様なことのできる空間がもっと都市の中に増えていけばいいですね。

西出●應典院は多元的な価値を共存させる空間としてハチャメチャなこともやりながら、どこかで宗教的な静謐さを残すというように、さまざまなものを含みながら都市の中で存在していってほしいと思います。

独自のカラーをもつこと

――いままでのお話で、「開いている」という姿勢は認めてもらえたのかなと感じました。

ただ、「應典院のめざすものは文化の基盤づくりだ」といっているために、抽象的すぎるというか、わかりにくくなってしまっているという反省もあります。そのあたりについて、おふたりはどう感じておられますか。

西出●最初に「應典院は物好きではじまった」という話をしましたが、好きは"数寄(すき)"であって、効率性や合理性だけではなく風流を好む気風が関西にはありますよね。

そういう意味で、「文化の基盤づくりをめざす」という方向性は大阪にマッチしているともいえるでしょうし、いろいろな可能性を秘めていると思います。

岩井●大阪は谷町が生まれたところですし、自分がいいと思うものや好きなものを大切に守り育てていこうとされる方は多いでしょうね。

ただ、いろいろな団体から企画が持ち込まれて場所を活用していただくこともいいとは思いますが、應典院のコンセプトを打ち出した企画を催していくことも必要でしょうね。そうでないと、ただの貸し会場になってしまうし、両方のバランスをとっていってほしいと思います。

いまの状態では、どこに目標をおいているのかが見えにくくなっている、というのも正直な感想です。

西出●ここに集う人たちが、育ち合いながら應典院のカラーをどう作っていくのかに興味はありますが、あまり性急にコトを進めてしまわない方がいいと思います。

宗教的な時間の流れから考えると、「まだ、たったの3年」でしかないでしょう。

岩井●3年前のオープニングに訪れたときには、風がスースー入ってきて、コンクリートの匂いしかしなかったんですが、今日入ってきたときは明らかに人間の匂いがしたんです。たんなる物(ぶつ)だったものが、そういうふうに変化したことは成果でしょうね。

いろいろ悩んだり困ったりしながらも、あきらめないで続けていくこと。ただ人が集まってくればいい、なるようになっていくと流れにまかせてしまうのではなく、自分たちの思いを主張する時間と、多くの人が使う時間を両立させながら、しつこく続けていってほしいと思います。

――「應典院は土であり畑。種をまき花を咲かせるのは一人ひとりの市民です」と謳っていることをどう具体化していくのか、それがこれからの課題ですね。今日はどうもありがとうございました。



▲「コモンズフェスタ'99」オープニング交流会。

市民活動サポート事業 活動報告

関西こども文化協会 まんまくらぶ

1月16日、應典院を会場として、フランスで開発された「カプラ」という積み木、数千個を使ってのワークショップを開催しました。

この催しは、「カプラ」を使っていろいろなものを共同で創りあげる中で、参加者どうし、こどももおとなも協力することの楽しさ、人とのつながりを感じてほしいとの願いから企画しました。

当日は、午前10時からと、午後1時からの2回を実施、乳児からおとなまで、あわせて170名ものご参加をいただきました。

京都からきていただいたインストラクターのリードで、グループに分かれてスタート。カプラは、細長い板状の積み木。そのシンプルさが、創造性を刺激し、会場のいたるところに個性的な作品が出現しました。

◆

「同じ形状の板なので、限定されず、積んだり広げたりと、年齢や作業人数で、いかようにも遊べた」

◆

普段の生活の中では、共同で何か作業をするといったことがなかなかできにくいもの。参加者の多くは親子でしたが、作品が完成したときの喜びが分かち合える経験は、親子それぞれの立場で、貴重にものになったことでしょう。

◆

「父親は、いつも付添役で、催しにこどもといっしょに参加し、体験することは少ないんですが、今回は構えることなく、楽しむことができました」

◆

こどもどうしの関わりも活発に見られました。特に、年長のこどもが年齢の低いこどもに対して、配慮する場面があちこちで見られ、こどもが遊びの中から学ぶことの多さを再確認しました。

最後はかまくらづくりで締めくくり。いままでで最大級のかまくら、とインストラクターの方が驚くほどのものもできました。

いまの社会では、コミュニケーションが不足しているといわれます。それは家族でも同様。ある目的のためでなく、ただ無邪気に遊ぶ。今回のワークショップで、おとなもこどもも、ひとりの人として向き合える時間を共有できたのではないでしょうか。



夕陽さんさんの会

1900年代最後の夜と、2000年最初の朝を橋渡しする催しを「夕陽さんさんの会」が企画しました。

1999年12月31日の大晦日から、2000年1月1日の元日にかけ、大阪・北港の舞洲で、『1000年の重みをたたえた夕陽と、次の1000年を招く朝日』をめでる集まりです。ミレニアムにまたがる機会をとらえ、二度とできない体験をみなさんに提供したいとの想いから、夕陽さんさんの会のボランティア、ジャズ歌手の岩井ゆき子さん、ユニオン協会の音楽家の方々、さまざまな方のご協力を得ながら、何とか開催にこぎつけた催しです。

舞洲野外活動センター・ロッジ舞洲のご厚意も助けられ、思い悩んでいたことが、雲散霧消したといってもよい、自画自賛ながらも成功に終わったイベントでした。

ここに、新聞記事という体裁を借りながら、その一部を紹介いたします。

◆　◆

大阪と夕陽にまつわる数々の催し、ボランティア活動を行ってきた「夕陽さんさんの会」は12月31日、1月1日の両日、大阪・北港の舞洲で、『2000年イヴin舞洲』を催した。「1000年の重みをたたえた夕陽と次の1000年を招く朝日と……」を謳い、大阪湾に沈む夕陽を観賞、生駒の山並みから上る朝日を迎え、その合間に岩井ゆき子さんらによるコンサートを楽しむため、約50人が各地から参会した。

大晦日午後4時から始まった受付には、同会の4人の女性ボランティアがあたり、夕陽観賞後に行われるファイア・ストームに投げ入れる「希いの木」も配られた。午後5時をすぎ、待ちに待った1900年代最後の夕陽が、大阪湾に沈み始める。参会者は舞洲に築かれた新天保山の山頂から、ちぬの海に没する古代から変わらぬ朱の太陽に見入った。曇り模様で心配されたが、波間に夕陽の下端が接する頃には雲も晴れ、参会者はその美しさに魅了された。

舞洲ロッジでバーベキューの夕食に舌鼓を打った後、ファイア・ストームの会場へ。山と積まれたタネ木に火が入れられ、燃え上がる炎に参会者は、それぞれ2000年に向けた希いを記した「希いの木」を一本、一本と投げ入れた。

舞洲ロッジのホールで開かれたコンサートは入場無料。同会関係者だけでなく、ロッジの宿泊者にも開放された。ジャズ・ボーカリストの岩井ゆき子さんのスウィングを皮切りに、ユニオン協会の音楽家たちによる演奏、ダンス、ボードビルなどが次々に繰り広げられ、2000年1月1日の午前零時のカウント・ダウンまで、時間を忘れる催しとなった。零時の時報と同時に、舞洲の上空には花火も打ち上げられ、夕陽さんさんの会のイベントをバックアップするかたちとなった。

宿泊希望者は予約されたログハウスに。中では空が白むまで、夕陽にまつわる話題に花が咲いた。午前7時過ぎ、同じ新天保山で、新ミレニアムの朝日を迎え、散会した。

舞台芸術祭、よもやまばなし

柳澤尚樹（舞台芸術祭実行委員）

2000年を迎えたシアトリカル應典院の、最初の舞台の幕が開いた。南船北馬一団の作品が、今年最初の舞台にして、舞台芸術祭の1番手となった。

この記念すべき劇団の制作のお話をいただいたのは昨年11月。本番まで残すところ1ヶ月ぐらいとなった、年の瀬もせまる寒々しい日であった。

各種打ち合わせの後、さりげなく脚本のでき上がり具合を質問。微妙な時の経過を味わった後に、作・演出の棚瀬美幸さんが重い口を開く。「まだ半分ぐらいなんですけど、再来週ぐらいには完成するかなって」、「……」うすら笑いの浮かんだ私の顔を見て、コーディネーターの古谷晃一郎君も微妙な笑みを浮かべる。

そういえば、南船の2週後に本番を控えるT. M. R. プロデュース（こちらも私が制作をさせていただいたのだが）の作・演出の城田邦生君（劇創ト社主宰）はまだ5ページとかいっていたような気もする。一言二言苦言を呈すべきか迷ったが、ここはひとまず励ますことにしよう。

2週間後、地下鉄天満橋駅から10分ぐらいのところにある稽古場に顔を出す。音響さんも来てくださり、稽古を見学している。と、演出の姿が見当たらない。「え、本が……!?」。遂に追われる者となった作家・棚瀬は、深々と頭をさげつつ登場すると、一転、こだわりの演出へと早変わり。作家と演出家。二足のワラジを履きこなせるか。ここからが正念場である。

さて、芸術祭の事務局の一人でもある私には、チラシの管理も仕事のひとつである。その段取りを組むべく、各劇団に連絡を入れる。12月頭の段階でそろったチラシは意外にも僅かで、The Stone Ageは仮チラシも危うい様子。聞けば、どうしてもイメージに合う役者さんが見つからないらしい。

売込隊ビームも仮チラシを入れるとのこと。ついでに進み具合を尋ねると、「まあ、順調ッスよ」とサラリと答えてのける、役者・山田かつろう君。劇団メロディアスメロンの作・演出、桂正樹君は「僕はもう本もアガリましたし、とりあえず（城田さんに比べたら）かなり勝ってますし（筆の速さは）」と鼻息が荒い。夫々の仕上がりはどうだろうか。

使い慣れた小屋とはいえ、ひとつの公演ごとにいろいろな問題が起こるものである。T. M. R. は4人のプロデューサーが集まって結成されたユニットであるが、作・演出の城田君が役者達に出した課題は、非常に大きかった。

毎回の稽古は、体力・筋力のトレーニングから始まる。たっぷり一時間のトレーニングの後に本稽古。終了後は一人ひとり、寒空の下でみっちりダメだし。体が慣れてくる頃、大流行となったインフルエンザの猛威に打たれる役者・スタッフたちが後をたたない。声をからす者、打ち身、捻挫にもがく者。

関係者の心配をよそに、本番は徐々に迫ってきている。無事に楽日を迎えることができたのかどうかは、各劇団からの報告を待ちたい。

VOICE ボイス

今回のVOICEは、西尾浩子さん。西尾さんは昨年12月に、子育てに悩む母親のために、癒しのネットワーク「ワンネス」（＝みんなはひとつ）というグループを立ち上げられました。“癒し”を通じての應典院との関わりについて期待されています。



私が應典院を知ったのは、他会場で秋田住職の講座を受講したときです。

受講後に應典院見学会があって、「いい企画だな、おもしろいところだな」と思い興味を持ちました。

寺町倶楽部の会員になったのは去年の7月ですが、それ以前にも、もっとおもしろい企画がいっぱいあったことを知り、期待が高まっているところです。

昨年12月に「ワンネス」を立ち上げました。自宅開放してワークショップや講演会をしています。

スタッフは9名、みんな子育て真最中です。私自身、子育てを経験して感じたのですが、子育て中の母親は、忙しくて悩みだらけ。相談しようにも、唯一の相談相手の夫も社会的に緊迫している状態（不景気、リストラ……）で話ができない。どんどん母親の立場がつらく苦しくなってきている。

そんな母親たちのための“癒しの場”は必要だと思ったんです。聞いてもらうだけでも癒されます。ほっとしにくる場所にしていきたいので、應典院のキーワード“癒し”と通じていると感じています。

應典院はとても魅力的な場所。私たちは、待ってばかりいないで、そこに行って、人と人との出会いを自分で見つけていくことが大切ですよね。

ここでは箱庭教室もあると聞き、できればその部分でのジョイント企画、精神世界的なワークショップ、カラーセラピー講座など、心が休まる企画ができればと思います。癒しのネットワークもここを起点にできたらいいですね。

秋田住職発 應典院掲示板

寒中お見舞い申し上げます。

應典院がスタートして3回目の新年を迎えました。手探りの出航でしたが、継続は力なり、ようやく應典院らしさが内に外に浸透しはじめた実感があります。

今年はまず夏頃に念願のホームページを立ち上げます。よそのお寺にはない應典院らしいホームページにすべく、いま知恵を絞っています。また、應典院ブックレットも創刊、ジャンルにとらわれず、應典院に有縁の方々の発言や行動を記録していきたいと思います。

つくづく痛感するのは、「場」がすべてのはじまりだということ。そこで生まれた出会いや学びを、これからどのようにまとめなおしていくのか。3年目の應典院の新しい役割だと考えています。ご期待ください。

自分感謝祭、盛会

昨年12月26日、年末恒例の自分感謝祭が開催、昼夜の2回でのべ50名の参加がありました。

これは一年の自分を仏様に懺悔して、新しい年に誓いを立てる應典院だけのオリジナル法要。照明と音響を駆使しながら、電子オルガンの荘重な調べの中、一人ずつ仏前で勤める厳かな儀式となりました。

当日は、東京のTBSのテレビ取材もあって、夜の年忘れ交流会も大いに盛り上がりました。



インターン杉原幸恵さん修了

昨年4月から、應典院二人目のインターン杉原幸恵さんが、研修を満了、11月30日に修了しました。期間中、多くのイベントに参加、また秋のコモンズフェスタでは写真展のプロデュースを担当するなど、應典院の原動力として活躍してくれました。

ここで養った経験を活かし、今後はNGOや福祉の世界で幅広い活躍を期待したいものです。本当にご苦労さまでした！

なにわ人形芝居フェスティバル



恒例行事「なにわ人形芝居フェスティバル」が、今年も3月26日、下寺町一帯で開催されます。全国のプロ・アマの人形劇団を招き、お寺のあちこちを会場に、子どもや家族に寺町文化にふれてもらおうという、下寺町挙げてのビッグイベント（写真は一昨年の模様）。

今回は、人形劇だけでなく、ブルースのコンサート、ガレージ・セール、歴史ウォーキング、仏式による花嫁行列など多彩な催しが盛り沢山です。應典院、大蓮寺ともに上演会場として開放されるほか、境内では青空市も開催されますので、ふるってご参加ください。詳しくは同封チラシをご覧ください。

教育改革について熱い討議を

昨年以来ご縁あって地元天王寺区のPTA協議会の会長職を務めていますが、その活動の集大成として、来る3月4日、2時から区内の生魂小学校でシンポジウム「地域から学校教育を考える」にコーディネーターとして参加します。

ゲストはいずれも旧知の方々ばかりで、教育改革の推進者・文部省政策課長の寺脇研さん、京都大学教授で大阪市教育改革懇話会の山崎高哉さん、タウン誌「ザ・おおさか」編集長の南野佳代さんら。目前に迫った教育改革を、自分たちの地域から見直していこうという趣旨の、楽しいトークイベントです。入場無料ですので、ふるってご参加くださいね（問い合わせ＝06－6774－9743天王寺区教育係）。

3周年記念に山折哲雄さん、来山！

應典院3周年を記念して、来る4月16日（日）14時から、宗教学者山折哲雄さんを招き、トークセッション「こころの場所はどこにあるか」を開催します。

山折さんは日本を代表する宗教学者で、現在白鳳女子大学学長（4月から京都造形芸術大学院学長）でいらっしゃいます。その深い洞察にあふれた見識は、仏教のみならず日本人の精神を照射するものとして数多くのファンを魅了しています。

前半は山折さんの講演、後半はお馴染みの金香百合さんをコーディネーターに、私も参加させていただいて、3人で「こころの場所」について語り合います。



当日の参加申込みは、ご招待者と寺町倶楽部の会員を優先受付いたします。残席ある場合のみ、一般のみなさんからも受付ますので、ご承知ください。詳しくは同封チラシをご覧ください。